

# パーソナリティ傾向の形成要因と共感性に関する研究

——両親の養育態度がタイプA・タイプCに及ぼす影響——

村山拓也\* 瀬戸正弘\*\*

A Study on Formulation factors of Personality tendency and Empathy : Focusing on the Type A and Type C affected by Parent's parenting attitudes

Takuya MURAYAMA\* Masahiro SETO\*\*

## 【要 約】

本研究の目的は、SIRI-33、PBI、共感性の尺度を用いて、両親の養育態度との関連から生活習慣病にかかりやすいパーソナリティ傾向の形成要因と共感性との関係性を調べることであった。両親の養育態度と性別の要因がパーソナリティ傾向に及ぼす影響について検討した結果から、タイプAは両親の養育態度により、タイプCのなかでも社会的同調性は父親の養育態度により、それぞれ影響を受けて形成された可能性があることが示唆された。また、タイプCのなかでも合理的・反情緒性は両親の養育態度以外による影響を受けて形成された可能性が高く、その素質は男性の方が持ちあわせていることが示唆された。パーソナリティ傾向と共感性との関係性について検討した結果から、タイプA傾向が高い場合、およびタイプCのなかでも社会的同調性が高い場合は“個人的苦痛”を感じやすいこと、タイプCのうち合理的・反情緒性の高さと共感性との関係性は乏しいことが示唆された。

キーワード：タイプA、タイプC、養育態度の認知、共感性

## I 問題と目的

健康とは「単に病気でない、虚弱でないというのみならず、身体的、精神的そして社会的に完全に良好な状態」を指している（厚生労働省、2000）。我が国の健康に関わる施策は、当所は感染症対策を中心に衛生水準を向上させるものから始まったが、徐々に疾病の予防や健康維持・増進にも重点が置かれるようになってきている（厚生労働省、2014）。また、我が国の死因は多い順に、悪性新生物（いわゆる“がん”）、心疾患、肺炎となっており（厚生労働省、2016）、その原因となる生活習慣を改善することが、寿命を伸ばすことにつながる

\* 神奈川大学大学院人間科学研究科（Graduate School of Human Sciences, discipline of clinical psychology, Kanagawa University）

\*\* 神奈川大学人間科学部（Faculty of Human Sciences, Kanagawa University）

ほか、医療費の負担削減にもつながると考えられている（厚生労働省，2014）。

生活習慣病は「食生活や運動習慣，休養，喫煙，飲酒等の生活習慣が，その発症や進行に関与する症候群」のことである（厚生労働省，2014）が，欧米においてはパーソナリティ傾向という心理的要因も，生活習慣病の発症や進行に影響を及ぼしていることが示されている（Eysenk, 1987）。生活習慣病と関連のあるパーソナリティ傾向として代表的なものは，米国の心臓病医によって提唱されたタイプ A 行動パターン（以後，タイプ A と記述する）であり，心臓病の危険因子として考えられている（Friedman & Rosenman, 1959）。タイプ A の特徴には，①時間切迫感，焦燥感，②熱中的，精力的，③競争性，敵意性，攻撃性などの要素を含むことが指摘されている（前田，1989）。

タイプ A の次に，生活習慣病と関連のあるパーソナリティとして提唱されたのはタイプ C パーソナリティ（以後，タイプ C と記述する）であり，米国の心理学者 Temoshok はタイプ C 傾向が高い人ほど，“がん”発症のリスクが高まると考えている（Temoshok & Dreher, 1992/1997）。タイプ C の特徴は，“感情抑圧”と“社会的同調性”の 2 要素を含むことが指摘されているが（Eysenck, 1994），とりわけ“感情抑圧”傾向の高い人ほど，“がん”発症のリスクが高くなるといわれている（Grossarth-Maticek, Kanazir, Vetter, & Schmidt, 1983）。

生活習慣病の発症には，遺伝的要因，外部環境的要因，生活習慣要因などが関連していることが明らかになってきているが（石原，2012），生活習慣病と関連のあるパーソナリティ傾向の形成過程についても研究が行われている。報告によると，タイプ A 傾向が高い人は，幼少期の親子関係において適切な自尊心を持つことができず，安心感の乏しい生活環境に置かれていた傾向にあったといわれている（Friedman, 1994）。また，“がん”になった人は，子どものころを両親と親密でなかったと振り返る傾向があることを，米国の Tomas 博士が 30 年におよぶ追跡調査の報告において指摘している（Thomas, Duszynski, & Shaffer, 1979）。以上を踏まえると，生活習慣病と関連のあるパーソナリティ傾向は，幼少期から成人に至るまでの間に，家族の影響によって強化された行動様式であることが示唆される。これより，両親の養育態度がタイプ A，タイプ C に及ぼす影響について研究することは意義があると考えられる。

ところで，現代社会はストレス社会とも言われており，我が国ではほぼ半数の人がストレスを感じながら生活していることが指摘されている（内閣府国民生活局，2008）。なお，心理・社会的ストレスには，さまざまな疾患との間に関連性があることが示されているが（Holmes & Rahe, 1967），特に生活習慣病の発症には，職業性のストレス要因が関与していることが明らかになっている（川上，2002）。菊地・笠貫・内山・橋口（1991）によると，虚血性心疾患患者（いわゆる“心臓病”）と関連のあるタイプ A 傾向の高い人は，職場環境には良く適応しており，共感性に富んでいることを報告している。一方，タイプ C 傾向の高い人は，物静か・まじめ・自分の感情を抑えて周囲に合わせる，忍耐強く・物事を合理的に考えるが，緊張や不安・不快感などを直接表現できずに対人関係や仕事，環境に過剰反応しているために，ストレスを徐々にため込んでいくといわれている（岩永，2003）。これより，周囲に対して過剰適応的であるタイプ C の人は，客観的にみると環境適応は良く見受

けられるが、物事を理性的に判断するために共感性は乏しいと考えられる。以上を踏まえると、生活習慣病と関連のあるパーソナリティ傾向と共感性との間には関係性があるとともに、パーソナリティ傾向と結びついた共感性のあり方が環境適応に影響を及ぼしていることが示唆される。これより、タイプ A、タイプ C と共感性との関係性について研究することは意義があると考えられる。

本研究の目的をまとめると、①両親の養育態度がタイプ A、タイプ C の形成に影響を及ぼしているのか、②タイプ A、タイプ C と共感性との間には関係性があるのか、以上 2 点について検討することである。なお、パーソナリティ傾向をより多様な観点から比較するために、生活習慣病と関連のあるタイプ A、タイプ C 以外のパーソナリティ傾向についても着目し、上記と同様に両親の養育態度、および共感性との関係性について検討を行った。

## II 方法

### 1 対象

関東圏内の私立大学に通う大学生、530 名に質問紙調査を実施し、記入漏れなどの欠損がなく、フェイスシートにて“中学校を卒業するまでの間の保護者として父親・母親がいた”、“中学校を卒業するまでの間にひとり親家庭で育った期間がなかった”の 2 項目に「はい」と回答した者を分析の対象とした。有効回答は 356 名（男性：168 名、女性：188 名、平均年齢：20.41 歳、 $SD=1.14$ ）であった。

### 2 調査内容

**タイプ A およびタイプ C を測定する尺度** Short Interpersonal Reactions Inventory 日本語短縮版 (SIRI-33) (熊野他, 2000) を用いた。この尺度は、生活習慣病と関連のあるパーソナリティ傾向を測定する尺度である。下位因子は、“タイプ 1”：理想化した対象への依存と失望、“タイプ 2”：迫害対象への執着と怒り・敵意、“タイプ 3”：精神病質的、“タイプ 4”：自律的・健康的、“タイプ 5”：合理的・反情緒性、“タイプ 6”：反社会的、の 6 つである。なお、下位因子の“タイプ 2”がタイプ A に、“タイプ 1”がタイプ C のうち社会的同調性に、“タイプ 5”がタイプ C のうち感情抑圧に、それぞれ相当している。質問は 33 項目で構成されている。回答形式は、「ほとんどない (1)」から「しょっちゅうある (4)」の 4 件法である。

**両親の養育態度を測定する尺度** Parental Bonding Instrument 日本語版 (小川, 1991) を用いた (以後、PBI と略記する)。この尺度は、子供からみた親の養育態度の自覚的評価スケールであり、オーストラリアの Parker らが 1979 年に、親の態度、行動の特徴を分類、整理して開発したものである。下位因子は、“養護因子” (Care factor；以後、CA 因子と略記する)、および“過保護因子” (Over-protection factor；以後、OP 因子と略記する) の 2 因子である。質問は 25 項目で構成されているが、被調査者には 16 歳までの父親、母親の養育態度について別々に想起してもらうよう教示をし、それぞれ回答を求めた。回答形式は、「まったく違う (0)」から「非常にそうだ (3)」の 4 件法である。父親、母親それぞれの

“CA 因子”（以後，“F-CA”，“M-CA”と略記する）得点が高いほど，愛情深く育てられたことを示し，父親，母親それぞれの“OP 因子”（以後，“F-OP”，“M-OP”と略記する）得点が高いほど，自律を促されて育てられたことを示す。

**共感性を測定する尺度** 青年期用多次元的特性共感尺度（登張，2003）を用いた。この尺度は，共感性を測定する尺度であり，青年前期・中期・後期を通して同じ意味内容で検討でき，利用できるという特徴をもつ。下位因子は，“共感的関心”（他者の不運な感情体験に対し，自分も同じような気持ちになり，他者の状況に対応した他者志向の暖かい気持ちを持つ），“個人的苦痛”（他者の苦痛に対して，不安や苦痛など，他者に向かわない自分中心の感情的反応），“ファンタジー”（小説や映画などに登場する架空の他者に感情移入する），“気持ちの想像”（他者の気持ちや状況を想像する）の4つである。質問は28項目で構成されている。回答形式は，「全く当てはまらない（1）」から「非常に当てはまる（5）」の5件法である。

### Ⅲ 結果

結果の統計処理は，統計パッケージ SPSS12.0 J を用いて行った。

#### 1 記述統計

**パーソナリティタイプの分類** 先行研究（熊野他，2000）に従い，SIRI の結果から被調査者を6つのパーソナリティタイプに分けた。手続きとして，男女別に SIRI の6下位因子それぞれの平均値と標準偏差を求めて，各パーソナリティタイプの標準得点を算出した。そして，被調査者ごとに SIRI の6下位因子の標準得点を比較検討し，標準得点が最大となった下位因子に相当するものを，各被調査者のパーソナリティとした。さらに，男女混合で各パーソナリティタイプごとに SIRI の6下位因子の標準得点の平均値を算出することで，それぞれが最大値を示すパーソナリティであることを特定した。Table 1 に結果を示す。

なお，先行研究（熊野他，2000）と同様に，各パーソナリティタイプの中で SIRI の下位因子の得点に差がみられるかを検討するために，分散分析による比較も行った。独立変数は

Table 1  
各パーソナリティタイプにおける SIRI の6下位因子の標準得点の平均値と標準偏差

	タイプ1 (n=66)	タイプ2 (n=53)	タイプ3 (n=57)	タイプ4 (n=65)	タイプ5 (n=61)	タイプ6 (n=54)
タイプ1 S <sup>a</sup>	<b>1.14(0.67)<sup>b</sup></b>	0.03(0.85)	-0.18(0.80)	-0.73(0.89)	-0.13(0.72)	-0.22(0.89)
タイプ2 S	-0.10(0.73)	<b>1.17(0.88)</b>	-0.19(0.84)	-0.65(0.71)	-0.39(0.82)	0.39(0.93)
タイプ3 S	-0.26(0.82)	0.01(0.79)	<b>1.09(0.77)</b>	-0.37(0.81)	-0.55(0.88)	0.24(0.98)
タイプ4 S	-0.48(0.95)	-0.49(0.74)	-0.12(1.00)	<b>1.00(0.72)</b>	0.13(0.69)	-0.16(0.98)
タイプ5 S	-0.26(0.90)	-0.22(0.70)	-0.48(0.83)	-0.02(0.83)	<b>1.15(0.72)</b>	-0.23(1.03)
タイプ6 S	-0.34(0.84)	0.21(0.63)	-0.04(0.78)	-0.40(0.76)	-0.58(0.70)	<b>1.38(0.90)</b>

<sup>a</sup> Standardized score = 標準得点

<sup>b</sup> 太字で示した数字は，各パーソナリティタイプそれぞれにおいて，SIRI の6下位因子の標準得点の平均値で最大値を示したものである。（ ）内の値は標準偏差を示す



上記の手続きにより群分けした6つのパーソナリティタイプ、従属変数はSIRIの6下位因子の生得点とした。その結果、SIRIの6下位因子の生得点においてそれぞれ、各パーソナリティタイプとの間に危険確率1%の水準で有意な差がみられた。

**父親・母親の養育態度の分類** PBIの下位因子得点における記述統計量の結果をTable 2に示す。“F-CA”得点の平均は23.71 ( $SD=7.23$ , 中央値=24), “F-OP”得点の平均は8.89 ( $SD=5.66$ , 中央値=8), “M-CA”得点の平均は28.46 ( $SD=5.56$ , 中央値=29), “M-OP”得点の平均は9.90 ( $SD=6.28$ , 中央値=9)であった。そして、先行研究(及川, 2005)に従い、被調査者のCA得点とOP得点の中央値を基準として、各因子の高低の組み合わせで父親・母親の養育態度をそれぞれ4群に分けた。父親・母親の養育態度4群の分け方をFigure 1に、父親・母親の養育態度4群の内訳をTable 3に、それぞれ示す。CA得点が中央値より高くOP得点が中央値よりも高いタイプを「情愛と過保護」、CA得点が中央値より高くOP得点が中央値よりも低いタイプを「冷淡と干渉」、CA得点が中央値より低くOP得点が中央値よりも高いタイプを「情愛と自律承認」、CA得点が中央値より低くOP得点が中央値よりも低いタイプを「無関心」と分類した。

## 2 男女差の検討

男女差の検討を行うために、SIRI, PBI, および共感性の各下位因子得点について $t$ 検定を行った。Table 4に、男女別に算出した各下位因子の平均値と標準偏差, および $t$ 検定の結果を示す。結果、SIRIの下位因子において、“タイプ1”, “タイプ4”, “タイプ5”につい

Table 2  
PBI 下位因子得点における記述統計量 ( $n=356$ )

	平均値	標準偏差	最低点	最高点	得点可能範囲	中央値
F-CA	23.71	(7.23)	0	36	0 ~ 39	24
F-OP	8.89	(5.66)	0	34	0 ~ 36	8
M-CA	28.46	(5.56)	11	36	0 ~ 39	29
M-OP	9.90	(6.28)	0	33	0 ~ 36	9

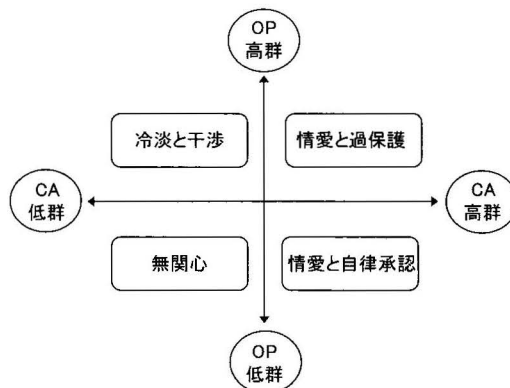


Figure 1. 父親・母親の養育態度4群の分け方

Table 3  
父親・母親の養育態度 4 群の内訳 (男女別)

	父親の養育態度 ( $n=325$ ) <sup>a</sup>			母親の養育態度 ( $n=330$ ) <sup>b</sup>		
	男性	女性	合計	男性	女性	合計
情愛と過保護	22	36	58	16	29	45
情愛と自律承認	50	55	105	56	68	124
冷淡と干渉	60	49	109	52	56	108
無関心	17	36	53	32	21	53

<sup>a</sup> 中央値を示した 31 名のデータを除く 325 名

<sup>b</sup> 中央値を示した 26 名のデータを除く 330 名

て男女の間に有意な差がみられ (それぞれ,  $t_{(353.85)}=2.03$ ,  $p<.05$ ;  $t_{(354)}=2.45$ ,  $p<.05$ ;  $t_{(354)}=3.60$ ,  $p<.01$ ), “タイプ 4”, “タイプ 5” は男性の方が高い値を示し, “タイプ 1” は女性の方が高い値を示した。PBI の下位因子において, “M-CA” についてのみ男女の間に有意な差がみられ ( $t_{(354)}=2.10$ ,  $p<.05$ ), 女性の方が高い値を示した。共感性の下位因子において, “共感的関心”, “個人的苦痛”, “ファンタジー” について男女の間に有意な差がみられ (それぞれ,  $t_{(354)}=3.74$ ,  $p<.01$ ;  $t_{(354)}=5.45$ ,  $p<.01$ ;  $t_{(354)}=4.37$ ,  $p<.01$ ), それぞれ女性の方が高い値を示した。

なお, それぞれの尺度において, 各下位因子得点の間に男女差の影響がみられたため, 以後の分析は男女別に検討した。

Table 4  
各下位因子の平均値と標準偏差および  $t$  検定の結果 (男女別)

	男性 (n=168)		女性 (n=188)		
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	t 値
SIRI					
タイプ 1	14.71	(3.32)	15.46	(3.64)	2.03*
タイプ 2	11.27	(3.39)	11.43	(3.77)	0.40
タイプ 3	11.25	(2.37)	11.64	(2.55)	1.48
タイプ 4	15.57	(2.80)	14.85	(2.79)	2.45*
タイプ 5	12.86	(2.35)	11.93	(2.54)	3.60**
タイプ 6	8.63	(2.58)	8.19	(2.22)	1.72
PBI					
F-CA	23.48	(6.55)	23.92	(7.82)	0.58
F-OP	8.93	(5.61)	8.86	(5.74)	0.11
M-CA	27.80	(5.59)	29.04	(5.49)	2.10*
M-OP	9.68	(5.98)	10.10	(6.56)	0.63
共感性					
共感的関心	45.63	(7.96)	48.76	(7.81)	3.74**
個人的苦痛	16.11	(4.48)	18.70	(4.47)	5.45**
ファンタジー	12.81	(3.67)	14.52	(3.71)	4.37**
気持ちの想像	17.55	(3.35)	17.98	(3.95)	1.09

\*  $p<.05$ , \*\*  $p<.01$

### 3 パーソナリティタイプと親の養育態度との関係性の検討

両親の養育態度がパーソナリティ傾向に及ぼす影響を検討するために、父親・母親それぞれの養育態度4群と性別を独立変数、SIRIの各下位因子得点を従属変数とした、2要因(4×2)の分散分析を別々に行った。

**父親の養育態度がパーソナリティ傾向に及ぼす影響について** 父親の養育態度4群と性別を独立変数、SIRIの各下位因子得点を従属変数として分散分析を行った。Table 5に結果を示す。結果より、交互作用はみられなかった。

父親の養育態度4群の主効果をみると、“タイプ1”、“タイプ2”、“タイプ3”、“タイプ4”、“タイプ6”において、有意な差がみられた(それぞれ、 $F_{(3,317)}=4.94$ ,  $p<.01$ ;  $F_{(3,317)}=9.65$ ,  $p<.01$ ;  $F_{(3,317)}=2.80$ ,  $p<.05$ ;  $F_{(3,317)}=5.05$ ,  $p<.01$ ;  $F_{(3,317)}=9.29$ ,  $p<.01$ )。Tukey法を用いて多重比較を行った結果、各パーソナリティ傾向に及ぼす、父親の養育態度4群の主効果の大小関係は、“タイプ1”では、「冷淡と干渉」>「情愛と自律承認」，“タイプ2”では、「冷淡と干渉」=「無関心」>「情愛と自律承認」，“タイプ3”では、「冷淡と干渉」>「情愛と自律承認」，“タイプ4”では、「情愛と自律承認」>「冷淡と干渉」，“タイプ6”では、「情愛と過保護」=「冷淡と干渉」>「情愛と自律承認」,「冷淡と干渉」>「無関心」であった(それぞれ危険確率5%水準で有意な差がみられた)。

性別の主効果をみると、“タイプ4”、“タイプ5”において有意な差がみられ(それぞれ、 $F_{(1,317)}=4.05$ ,  $p<.05$ ;  $F_{(1,317)}=14.96$ ,  $p<.01$ )，“タイプ4”、“タイプ5”においてともに男性の方が高い値をそれぞれ示した。

以上より、“タイプ1”、“タイプ2”、“タイプ3”、“タイプ6”では父親の養育態度4群の主効果が、“タイプ4”は父親の養育態度4群および性別の主効果が、“タイプ5”では性別の主効果が、それぞれパーソナリティ傾向に影響を与えていることが示された。

**母親の養育態度がパーソナリティ傾向に及ぼす影響について** 母親の養育態度4群と性別を独立変数、SIRIの各下位因子得点を従属変数として分散分析を行った。Table 6に結果を示す。結果より、交互作用はみられなかった。

母親の養育態度4群の主効果をみると、“タイプ2”、“タイプ4”、“タイプ6”において有意な差がみられた(それぞれ、 $F_{(3,322)}=11.55$ ,  $p<.01$ ;  $F_{(3,322)}=6.79$ ,  $p<.01$ ;  $F_{(3,322)}=6.15$ ,  $p<.01$ )。Tukey法による多重比較を行った結果、各パーソナリティ傾向に及ぼす、母親の養育態度4群の主効果の大小関係は、“タイプ2”では、「冷淡と干渉」>「情愛と自律承認」=「無関心」，“タイプ4”では、「情愛と自律承認」>「冷淡と干渉」=「無関心」，“タイプ6”では、「冷淡と干渉」>「情愛と自律承認」=「無関心」であった。(それぞれ危険確率5%水準で有意な差がみられた)。

性別の主効果をみると、“タイプ1”、“タイプ4”、“タイプ5”において有意な差がみられ(それぞれ、 $F_{(1,322)}=6.32$ ,  $p<.05$ ;  $F_{(1,322)}=11.01$ ,  $p<.01$ ;  $F_{(1,322)}=12.21$ ,  $p<.01$ )，“タイプ1”では女性の方が高い値を、“タイプ4”、“タイプ5”では男性の方が高い値をそれぞれ示した。

以上より、“タイプ2”、“タイプ6”では母親の養育態度4群の主効果が、“タイプ4”では母親の養育態度4群および性別の主効果が、“タイプ1”、“タイプ5”では性別の主効果

Table 5

父親の養育態度 4 群×性別を独立変数, SIRI の各下位因子得点を従属変数とした 2 要因 (4 × 2) の分散分析, および多重比較の結果

n	1. 「情愛と過保護」		2. 「情愛と自律承認」		3. 「冷淡と干渉」		4. 「無関心」		F 値			父親の養育態度の主効果における多重比較の結果 <sup>a</sup>
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	群間差	性差	交互作用	
タイプ 1	14.64 (2.90)	15.42 (3.78)	13.34 (3.29)	14.82 (3.78)	15.63 (3.08)	16.12 (3.23)	15.18 (3.19)	15.56 (4.11)	4.94**	3.47	0.46	3>2
タイプ 2	11.77 (2.99)	10.92 (3.54)	9.62 (3.10)	10.53 (3.49)	12.72 (3.18)	12.51 (3.43)	11.71 (3.95)	11.56 (4.21)	9.65**	0.03	0.91	3>2, 4>2
タイプ 3	11.27 (2.03)	11.86 (2.61)	10.60 (2.59)	11.20 (2.66)	11.98 (2.28)	11.76 (2.39)	11.06 (2.28)	11.69 (2.64)	2.80*	1.77	0.67	3>2
タイプ 4	14.86 (2.47)	15.56 (2.57)	16.40 (3.01)	15.67 (2.52)	15.40 (2.55)	13.76 (3.08)	15.59 (3.10)	14.58 (2.73)	5.05**	4.05* (男>女)	2.21	2>3
タイプ 5	12.68 (2.21)	11.58 (2.36)	13.18 (2.34)	12.09 (2.50)	12.58 (2.24)	11.90 (2.85)	13.88 (2.52)	12.22 (2.14)	1.74	14.96** (男>女)	0.45	n.s.
タイプ 6	9.09 (2.00)	8.78 (2.22)	7.82 (2.33)	7.40 (2.21)	9.82 (2.83)	8.45 (2.17)	7.59 (2.03)	8.19 (2.19)	9.29**	1.76	2.13	1>2, 3>2, 3>4

\* $p<.05$ , \*\* $p<.01$

<sup>a</sup> 父親の養育態度 4 群はそれぞれ, 1. 「情愛と過保護」, 2. 「情愛と自律承認」, 3. 「冷淡と干渉」, 4. 「無関心」と対応している  
群間の有意な差は, それぞれ危険確率 5% 水準でみられた

Table 6

母親の養育態度 4 群×性別を独立変数, SIRI の各下位因子得点を従属変数とした 2 要因 (4 × 2) の分散分析, および多重比較の結果

n	1. 「情愛と過保護」		2. 「情愛と自律承認」		3. 「冷淡と干渉」		4. 「無関心」		F 値			母親の養育態度の主効果における多重比較の結果 <sup>a</sup>
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	群間差	性差	交互作用	
タイプ 1	15.19 (3.56)	15.55 (3.72)	14.36 (3.64)	15.00 (4.09)	15.13 (3.08)	15.52 (3.05)	14.09 (2.63)	17.05 (3.72)	1.13	6.32* (女>男)	1.80	n.s.
タイプ 2	10.50 (2.31)	12.00 (3.91)	10.14 (3.32)	10.21 (3.59)	13.06 (3.39)	12.68 (3.62)	10.63 (3.28)	11.95 (3.68)	11.55**	2.13	1.17	3>2, 3>4
タイプ 3	12.25 (1.95)	12.21 (2.91)	11.04 (2.52)	11.56 (2.61)	11.46 (2.18)	11.63 (2.42)	10.84 (2.26)	11.43 (2.31)	1.87	1.02	0.23	n.s.
タイプ 4	16.31 (2.24)	14.34 (2.61)	15.96 (3.10)	16.04 (2.42)	14.81 (2.64)	14.16 (3.07)	15.59 (2.87)	13.62 (2.29)	6.79**	11.01** (男>女)	2.47	2>3, 2>4
タイプ 5	13.44 (2.00)	11.86 (2.76)	12.96 (2.37)	12.07 (2.37)	12.35 (2.48)	12.00 (2.49)	13.00 (2.16)	11.62 (2.54)	0.58	12.21** (男>女)	0.90	n.s.
タイプ 6	9.00 (2.66)	8.10 (2.24)	8.05 (2.30)	7.84 (2.14)	9.71 (2.87)	8.77 (2.24)	7.72 (1.89)	8.67 (2.48)	6.15**	0.91	2.09	3>2, 3>4

\* $p<.05$ , \*\* $p<.01$

<sup>a</sup> 母親の養育態度 4 群はそれぞれ, 1. 「情愛と過保護」, 2. 「情愛と自律承認」, 3. 「冷淡と干渉」, 4. 「無関心」と対応している  
群間の有意な差は, それぞれ危険確率 5% 水準でみられた

が, それぞれパーソナリティ傾向に影響を与えていることが示された。

#### 4 パーソナリティタイプと共感性との関係性の検討

各パーソナリティ傾向と共感性との関係性を検討するために, それぞれの下位因子の合計

得点についてピアソンの積率相関係数を算出した。Table 7に男性のみの結果を、Table 8に女性のみの結果をそれぞれ示す。

結果、男女に共通して、“タイプ1”と“個人的苦痛”の間（男女それぞれ、 $r=.34$ ,  $p<.01$ ;  $r=.33$ ,  $p<.01$ ），“タイプ2”と“個人的苦痛”の間（男女それぞれ、 $r=.39$ ,  $p<.01$ ;  $r=.26$ ,  $p<.01$ ）にそれぞれ弱い正の相関がみられた。また，“タイプ4”と“個人的苦痛”の間（男女それぞれ、 $r=-.36$ ,  $p<.01$ ;  $r=-.29$ ,  $p<.01$ ），“タイプ6”と“共感的関心”の間（男女それぞれ、 $r=-.33$ ,  $p<.01$ ;  $r=-.31$ ,  $p<.01$ ）にそれぞれ弱い負の相関がみられた。

一方で、男性においてのみ，“タイプ6”と“気持ちの想像”の間に弱い負の相関がみられ（ $r=-.24$ ,  $p<.05$ ），女性においてのみ，“タイプ3”と“個人的苦痛”の間（ $r=.31$ ,  $p<.01$ ），“タイプ4”と“共感的関心”，“ファンタジー”，“気持ちの想像”の間（それぞれ、 $r=.25$ ,  $p<.01$ ;  $r=.23$ ,  $p<.01$ ;  $r=.37$ ,  $p<.01$ ），“タイプ5”と“気持ちの想像”の間（ $r=.31$ ,  $p<.01$ ）にそれぞれ弱い正の相関がみられた。

Table 7  
SIRI および共感性の各下位因子における相関係数（男性のみ： $n=168$ ）

	タイプ1	タイプ2	タイプ3	タイプ4	タイプ5	タイプ6
共感的関心	.18*	-.05	-.11	.02	.14	-.33**
個人的苦痛	.34**	.39**	.14	-.36**	-.10	.16*
ファンタジー	.04	.02	.07	-.02	.07	-.04
気持ちの想像	.03	-.03	-.16*	.13	.18*	-.24*

\*  $p<.05$ , \*\*  $p<.01$

Table 8  
SIRI および共感性の各下位因子における相関係数（女性のみ： $n=188$ ）

	タイプ1	タイプ2	タイプ3	タイプ4	タイプ5	タイプ6
共感的関心	.06	-.07	-.11	.25**	.15*	-.31**
個人的苦痛	.33**	.26**	.31**	-.29**	-.10	.13
ファンタジー	-.02	.05	.06	.23**	-.01	.05
気持ちの想像	.05	.03	-.14	.37**	.31**	-.14*

\*  $p<.05$ , \*\*  $p<.01$

## IV 考察

### 1 男女差の検討

パーソナリティ傾向について SIRI の下位因子について、男女差の検討をするために  $t$  検定を行った。その結果，“タイプ1”は女性の方が高い値を示し，“タイプ4”，“タイプ5”については男性の方が高い値を示した。“タイプ4”は自律的・健康的なパーソナリティ傾向であり，“タイプ1”と“タイプ5”はタイプCの特徴に合致するパーソナリティ傾向である。これより、健康的なパーソナリティ傾向は男子大学生の方が多いこと、タイプCの

特徴に合致するパーソナリティ傾向は男女で異なった関係性がみられることが明らかとなった。すなわち、タイプCのなかでも社会的同調性の傾向は女子大学生との関連があること、その一方で合理的・反情緒性の傾向は男子大学生と関連があることが示唆された。

大学生において、男性の方が女性に比べて健康的であるという結果は、先行研究と一致している（西山・笹野，2004；中井・茅野・佐野，2007）。これより、女子大学生は精神的悩みを抱えやすい傾向にあることが推察される。

女性の方が社会的同調性の傾向が高いという結果は、他者との関係性にもとづいた人格形成プロセスの差による影響を受けていると考えられる。伊藤（1993）は、自己確立を前提として他者との関係性を築いていく傾向が高いのは男性であり、他者とのつながりの上に自己を作りあげていく傾向が高いのは女性である、と指摘している。これより、女性は男性に比べて、他者とのつながりを重視する対人関係を選択するために、社会的同調性に男女差がみられたと考えられる。

男性の方が合理的・反情緒性の傾向が高いという結果は、理想－現実自己のズレの調整過程によるものであると考えられる。松岡（2006）によると、人が「こうでありたい」と望む理想自己と、現実自己にズレが生じた際に、人はそのズレを調整しようと動機づけられると指摘している。そして、青年期の男性は現状を肯定的に解釈して理想を変えようとするが、女性は粘り強く現実を理想に近づけようとする傾向を示すという違いがみられることが示唆されている。これより、青年期の男子大学生は女子大学生に比べて、自己の在り方について合理的に解釈することで現実に適応しようとする傾向が高いために、合理的・反情緒性に男女差がみられたと考えられる。

**親の養育態度について** PBIの下位因子について、男女差の検討をするために $t$ 検定を行った。その結果、“M-CA”は女性の方が高い値を示した。これより、男子大学生よりも女子大学生の方が、母親から暖かく育てられたと認識していることが明らかとなった。これは、先行研究の結果と一致するものであった（伊藤，2010）。女子大学生は男子大学生に比べて、友人だけではなく母親に対して自己開示をする傾向にあること（榎本，1987）、家族、友人からのサポートを高く知覚すること（福岡・橋本，1995）、中学、高校、大学へと上がるにつれて女性は親への依存意識が強まること（加藤・高木，1980）、などが指摘されている。これらより、女子大学生は母親との情緒的な結びつきが強いために、母親から愛情深く育てられた、という認識を男子大学生よりも強く抱きやすいと考えられる。

**共感性について** 共感性の下位因子について、男女差の検討をするために $t$ 検定を行った。その結果、“共感的関心”、“個人的苦痛”、“ファンタジー”について、女性の方が高い値を示した。これより、男性よりも女性の方が共感的であることが明らかとなった。これは、先行研究と一致しているものであった（大庭，2010）。認知神経科学の研究をしている Simon Baron-Cohen（2003/2004）は、女性の脳は他者の気持ちを我が事として感じるようにつくられていると主張している。これより、男女の脳に違いがみられるために、共感性に男女差がみられたと考えられる。

## 2 分散分析によるパーソナリティ傾向と親の養育態度との関係性の検討

SIRI に影響を及ぼす要因として、父親・母親の養育態度 4 群と性別を独立変数、SIRI 下位因子得点を従属変数とした、2 要因 (4 × 2) の分散分析を行った。その結果、交互作用はみられなかった。しかし、父親・母親の養育態度 4 群による主効果、および性別の主効果が各パーソナリティ傾向に影響を及ぼしていることが明らかになった。

“タイプ 1”と親の養育態度との関係性について “タイプ 1”において、有意であった主効果をみると、父親の養育態度 4 群の主効果の大小関係は、「冷淡と干渉」>「情愛と自律承認」であった。性別の主効果の大小関係は、母親の養育態度 4 群に分けた場合において女性の方が高い値を示した。これらの結果より、タイプ C のなかでも社会的同調性が高い人は、父親の愛情が欠如しており、統制が強いと認識していること、情緒的な母親の関わりが女性の社会的同調性を促進させる傾向にあることが明らかとなった。他者との関係を回避する傾向が強い人は、自己を犠牲にして仲間と同じ行動をとる傾向があること (田島・山崎・岩瀧, 2015)、対人回避傾向の促進は、親による統制と養育への熱意が影響しており、抑制には情緒的な安定性が影響していること (佐々木・小林, 2007)、などが指摘されている。これらより、父親と情緒的な結びつきが乏しく、干渉的であったと感じている人は、対人回避傾向が高く、自己犠牲的な行動をとりやすいということが示唆される。一方、母親との間に親密さを感じている場合は、基本的対人関係において、男性は指導的な態度をとること、女性は敵対的な態度をとらないこと (橋本・高木, 2006) が指摘されている。これより、母親によって情緒的に育てられたと認識している女性は、パーソナリティ傾向として社会的同調性が高いことが示唆された。

“タイプ 2”と親の養育態度との関係性について “タイプ 2”において、有意であった主効果をみると、父親の養育態度 4 群の主効果の大小関係は、「冷淡と干渉」=「無関心」>「情愛と自律承認」であり、母親の養育態度 4 群の主効果の大小関係は、「冷淡と干渉」>「情愛と自律承認」=「無関心」であった。この結果より、タイプ A 傾向の高い人は、父親・母親ともに愛情が欠如しており、とくに母親による統制が強いと認識していることが明らかとなった。両親が有名大学を志向すると、子どもに対して学習、進学に関して過干渉、過保護を主とした養育態度を想起させる (大芦・岡崎・山崎, 1996)、両親が子どもに対して非支持的で、権威主義的な支配を行うと、競争的で過剰な達成行動を子どもは取るため、タイプ A 傾向の発達が促進される (大芦, 2002)、などが指摘されている。これらより、タイプ A の形成には、両親の養育態度や価値感が影響を及ぼしている可能性が高く、親から無条件の愛情を注がれず、統制的な環境で育てられると、その子どもは親からの愛情や承認を得ようとし、競争的に勉強をするといった行動をとるのではないかと考えられる。

“タイプ 3”と親の養育態度との関係性について “タイプ 3”において、有意であった主効果をみると、父親の養育態度 4 群の主効果の大小関係は、「冷淡と干渉」>「情愛と自律承認」であった。この結果より、精神病質的な人は、父親の愛情が欠如しており、統制が強いと認識していることが明らかとなった。神経症患者は、親に対して養護に欠けており、統制的であると評価する傾向があること (Parker, 1984)、不安神経症の発症には、親の養護の特徴が欠けており、かつ過保護的、過干渉の傾向が強いこと (小川, 1994)、などが指摘



されている。これらの先行研究は結果と一致しているが、父親による養育態度のみが神経症に影響を及ぼすという研究は見受けられない。したがって、両親の養育態度と精神病質的なパーソナリティとの関係性については、さらに検討することが望まれる。

“タイプ4”と親の養育態度との関係性について “タイプ4”において、有意であった主効果をみると、父親の養育態度4群の主効果の大小関係は、「情愛と自律承認」>「冷淡と干渉」であり、母親の養育態度4群の主効果の大小関係は、「情愛と自律承認」>「冷淡と干渉」=「無関心」であった。性別の主効果の大小関係は、父親・母親の養育態度4群に分けた場合において、共に男性の方が高い値を示した。これらの結果より、自律的・健康的な人は、両親から愛情深く、かつ自律を促されて育ったと強く認識していること、そして女性よりも男性の方が自律的・健康的なパーソナリティ傾向が形成されやすいことが明らかとなった。父親、母親ともに受容的な養育態度のもとで育った幼児は、父親、母親ともに教示、指導的な養育態度のもとで育った幼児や、母親が受容的でない養育態度の幼児よりも、自律性を発達させていることが指摘されている（奥田、1996）。これより、健康的・自律的なパーソナリティ傾向の形成には、両親の養育態度が影響を及ぼしている可能性が高いこと、とりわけ母親の受容的な態度が子どもの自律性を促進させる可能性があることが示唆された。

“タイプ5”と親の養育態度との関係性について “タイプ5”において、有意であった主効果をみると、性別の主効果の大小関係は、父親・母親の養育態度4群に分けた場合において、共に男性の方が高い値を示した。この結果より、タイプCのなかでも合理的・反情緒性は養育態度による影響を受けないものの、男性の方が合理的・反情緒性のパーソナリティ傾向が形成されやすいことが明らかとなった。佐藤（2001）は、合理的・理論的なパーソナリティは親子関係に影響を及ぼさないことを示しており、先行研究と一致した結果が得られたといえる。これより、タイプCのなかで合理的・反情緒性は親の養育態度以外の要因との関係性が強いことが示唆された。

“タイプ6”と親の養育態度との関係性について “タイプ6”において、有意であった主効果をみると、父親の養育態度4群の主効果の大小関係は、「情愛と過保護」=「冷淡と干渉」>「情愛と自律承認」、「冷淡と干渉」>「無関心」であり、母親の養育態度4群の主効果の大小関係は、「冷淡と干渉」>「情愛と自律承認」=「無関心」であった。この結果より、反社会的な人は両親の愛情が欠如しており、統制が強いと認識していることが明らかとなった。反社会的な問題行動の発達に強い関連を示すものとして、親の子どもに対するスーパービジョンの不足や親子関係の希薄さ、親の子どもに対する愛着感の欠如があることが指摘されており（Loeber & Loeber, 1986）、母親の拒否的な態度が児童の不適切な行動のモデルになっている可能性があるといわれている（戸ヶ崎・坂野、1997）。これらより、両親との情緒的交流の乏しさや、とりわけ母親の養育スキルが欠如していることが、反社会的なパーソナリティ傾向を促進させると考えられる。

### 3 相関分析によるパーソナリティ傾向と共感性との関係性の検討

各パーソナリティ傾向と共感性との関係性を検討するために、それぞれの下位因子の合計得点についてピアソンの積率相関係数を男女別で算出した。その結果、男女に共通した関連

がみられるもの、男女で異なる関連がみられるものがあることが明らかとなった。

“タイプ1”と共感性との関係性について “タイプ1”と“個人的苦痛”の間に弱い正の相関がみられたという結果は、男女に共通していた。この結果より、タイプCのうち社会的同調性が高い人は、助けを必要としている他者をみたときに混乱しやすい、ということが示唆される。同調性格の高群は低群よりも共感性が高いこと（橋本・塩見，2000）、ネガティブな感情を共有しやすい人は、他者の悲しみや不安に巻き込まれやすく、“個人的苦痛”に陥りやすいこと（櫻井他，2011）が指摘されている。これらより、タイプCのなかでも社会的同調性が高い“タイプ1”の人は共感性が高く、他者の悲しみや不安といったネガティブな感情に対しても共感しやすい傾向にあるため、“個人的苦痛”に陥りやすいと考えられる。

“タイプ2”と共感性との関係性について “タイプ2”と“個人的苦痛”の間に弱い正の相関がみられたという結果は、男女に共通していた。この結果より、タイプAの傾向が高い人は、助けを必要としている他者を見たときに混乱しやすい、ということが示唆される。タイプAの特徴は、敵意性・ワーカホリック・完璧主義である（瀬戸・長谷川・坂野・上里，1997）が、タイプA傾向の高い人は共感性に富んでおり、職場適応はよいことが指摘されている（菊地他，1991）。これらより、タイプA傾向の高い人は、困っている他者を見ても助ける余裕がないほど、自分の仕事や課題を完璧にこなすことに熱中しやすく、他者が自分の仕事や課題を脅かす恐れがある場合は、敵意性のために手助けをするかどうかで混乱しやすい、ということが示唆される。

“タイプ3”と共感性との関係性について “タイプ3”と“個人的苦痛”の間に弱い正の相関がみられたという結果は、女性においてのみ得られた。この結果より、精神病質的な女性は、助けを必要としている他者を見たときに混乱しやすい、ということが示唆される。川端・大淵（2015）によると、女性は男性に比べて、対人面で過敏に反応して落ち込んだりしやすく、また、他者の苦痛に同情したり自分自身が感情を揺さぶられたりする傾向が高い、と指摘している。これより、“タイプ3”に相当する精神病質的な女性は、対人面で自分自身の気持ちが揺さぶられてしまう傾向が高いため、“個人的苦痛”の状態に陥りやすいと考えられる。

“タイプ4”と共感性との関係性について “タイプ4”と“個人的苦痛”の間に弱い負の相関がみられたという結果は男女に共通していた。この結果より、自律的・健康的な人は、助けを必要としている他者を見たときに混乱せずに行動できる、ということが示唆される。島井・大竹・宇津木・内山（2002）は、健康群は不健康群に比べて、自己コントロールと共感性が有意に高い、と指摘している。これより、精神的健康度の高い人は、周囲の状況が変化しても自分を見失わないで、共感的に他者と関わるができるため、“個人的苦痛”の状態に陥りにくいと考えられる。

一方で、女性においてのみ、“タイプ4”と“共感的関心”、“ファンタジー”、“気持ちの想像”の間にそれぞれ弱い正の相関がみられた。この結果より、自律的・健康的な女性は多次元にわたって共感的である、ということが示唆される。豊田（2008）は、女子大学生を対象として共感性について研究をした結果、女性は相手の気持ちになれるという経験をするにより、同じような情動が自分に生じた場合にも、その経験を利用して自分の情動の制御

が可能である，ということを報告している。これより，女性は男性に比べて他者に対して共感するという経験が多く，その経験によって自分の気持ちを安定させることができるため，共感的な女性は自律的・健康的なパーソナリティ傾向を示すと考えられる。

“タイプ5”と共感性との関係性について “タイプ5”と共感性の下位因子の間に，相関関係がみられないという結果は男女に共通していた。この結果より，タイプCのうち合理的・反情緒性の傾向が高い人は，共感性との関係は乏しいということが明らかになった。福田（2008）は，感情の多様性によって喚起される共感も多様性を持っているため，嫉妬や妬みといった不合理的な行動に結びつくものもあると指摘している。これより，タイプCのうち合理的・反情緒性の傾向が高い人は，時として不合理的な行動に結びつく負の感情を抱いても，物事を客観的に判断することができると考えられる。

“タイプ6”と共感性との関係性について “タイプ6”と“共感的関心”の間に弱い負の相関がみられたという結果は男女に共通していた。この結果より，反社会的な人は他者の感情体験に対して暖かい感情を抱きにくいということが示唆される。勝間・山崎（2008）によると，意図的に仲間関係を操作することによって，他者を傷つけようとする傾向が高い児童は，攻撃性が低い児童に比べて，攻撃反応を受けたものが悲しんでいる，かわいそう，はげましてあげたいと感じていない傾向が強い，ということを報告している。これより，大学生においても反社会的なパーソナリティ傾向が高い人は，“共感的関心”を抱きにくいと考えられる。

一方で，男性においてのみ，“タイプ6”と“気持ちの想像”の間に弱い負の相関がみられたという結果が得られた。この結果より，反社会的な男性は他者の気持ちや状況を想像することが不得意であることが示唆される。谷（2010）によると，男性は他者の視点に立ってその気持ちや状況を想像しようとする傾向が高いほど，罪悪感を喚起しやすいと指摘している。これより，罪悪感を抱きにくい男性は，他者の気持ちや状況を想像することが難しいため，反社会的なパーソナリティ傾向を示すと考えられる。

## V まとめ

本研究の目的は，生活習慣病にかかりやすいパーソナリティ傾向であるタイプA，タイプCの形成要因，およびパーソナリティ傾向と共感性との関係性について調べることであった。また，パーソナリティ傾向を比較，検討するためにSIRI-33を使用し，タイプA，タイプC以外のパーソナリティ傾向についても測定を行い，それぞれ分析をした。なお，パーソナリティの形成要因として，両親の養育態度の認知に着目し，PBIを使用することで検討を行った。

男女差を検討するために行った $t$ 検定の結果より，①タイプCの特徴のうち社会的同調性は女性の方が高い，②タイプCの特徴のうち合理的・反情緒性は男性の方が高い，③タイプAは男女差による影響を受けない，④自律的・健康的なパーソナリティ傾向は男性の方が高い，⑤女性の方が母親から愛情深く育てられたと認識している傾向が高い，⑥女性の方が多次元にわたって共感的である，ということが明らかとなった。男女の違いについてまと

めると、男性は合理的にものごとを考えることで現実適応をしている、それに対して女性は他者とのつながりに基づいて自己を形成する傾向があるため、他者志向の暖かい気持ちを持ちやすく、架空の他者に感情移入しやすいが、他者の悲しみや不安にも巻き込まれやすい傾向があり、精神的な悩みを抱えやすい、等の特徴がみられることが示唆された。

両親の養育態度と性別の要因が、パーソナリティ傾向に及ぼす影響について検討するために行った分散分析の結果より、①タイプAが高い人、もしくは反社会的なパーソナリティ傾向が高い人は、両親の愛情が欠如しており、統制的であると認識している、②精神病質的なパーソナリティ傾向が高い人、もしくはタイプCの特徴のうち社会的同調性が高い人は、父親の愛情が欠如しており、統制的であると認識している、③自律的・健康的なパーソナリティの形成が高い人は、両親から愛情深く、かつ自律を促されて育ったと強く認識している、④タイプCのなかでも合理的・反情緒性は両親の養育態度による影響を受けない、⑤男性の方が自律的・健康的なパーソナリティ傾向、および合理的・反情緒性のパーソナリティ傾向の素質が高い、⑥女性においては情緒的な母親の関わりが社会的同調性の促進要因になる可能性もある、ということが明らかとなった。以上を踏まえると、親による愛情不足、統制の強さは、生活習慣病にかかりやすいパーソナリティ傾向や不適応的なパーソナリティ傾向と関連があり、とりわけ母親よりも父親による養育態度のあり方がパーソナリティの形成に及ぼす影響は大きい、ということが示唆された。また、男性に多い自律的・健康的なパーソナリティ傾向と、合理的・反情緒性のパーソナリティ傾向は、両親の養育態度のあり方よりも、男女差による影響がみられること、女性においては母親の情緒的な関わりによって社会的同調性が促進されることが示唆された。

パーソナリティ傾向と共感性との関係性について検討するために行った相関分析の結果より、①タイプAの人、およびタイプCのなかでも社会的同調性が高い人は、“個人的苦痛”を感じやすい、②タイプCのうち合理的・反情緒性が高い人と、共感性との関係性は乏しい、③精神病質的な女性は、“個人的苦痛”を感じやすい、④自律的・健康的な人は、“個人的苦痛”を感じにくい、⑤反社会的な人は、“共感的関心”を抱きにくい、⑥自律的・健康的な女性は、多次元にわたって共感的である、⑦反社会的な男性は、“気持ちの想像”が難しい、ということが明らかとなった。以上を踏まえると、自律的・健康的な女性は、多次元にわたって共感的であり、他者との関わりにおいて情緒的な混乱に巻き込まれずに行動できる、その一方で、対人面で過敏な女性や、自分のことに一生懸命であり他者に対して敵意性をもっている人、周囲に合わせようとする人は、他者との関わりにおいて情緒的な混乱に巻き込まれやすい傾向にある、ということが示唆された。なお、反社会的な人は他者の感情体験に対して暖かい感情を抱きにくく、反社会的な男性は他者の気持ちや状況を想像することが不得意であることが示唆された。

## VI 今後の課題

今回の調査では、パーソナリティの形成要因として、両親の養育態度について着目したが、生まれ持った先天的なパーソナリティ傾向を示す気質と両親の養育態度による相互作用

がパーソナリティに及ぼす影響や、養育態度以外の環境要因がパーソナリティの形成に及ぼす影響について調べることができなかった。タイプCのなかでも合理的・反情緒性は両親の養育態度による影響を受けない一方で、男性の方が多いという結果からも、気質や養育態度以外の要因がパーソナリティ傾向の形成に大きな影響を及ぼしている可能性は高いと考えられる。今後は、社会的役割や、きょうだい関係、家庭環境、両親の価値観といった要因も含めて、生活習慣病にかかりやすいパーソナリティがどのような要因から影響を受けて形成、促進されるのか、ということを検討することが望まれる。

また、パーソナリティ傾向と共感性との関係性について調査をしたが、パーソナリティ傾向と共感性の相互作用によって、環境適応のあり方やストレスの感じ方がどのように変化するかについて調べることができなかった。今回の調査より、タイプAの人、およびタイプCのなかでも社会的同調性が高い人は、助けを必要としている他者をみたときに混乱しやすいということが明らかになったが、タイプCのうち合理的・反情緒性が高い人と、共感性との関係性は示唆されなかった。これより、情緒的に混乱する状況におかれた場合、パーソナリティ傾向によって具体的な対応は異なるのか、状況の捉え方やストレスの感じ方は違うのか、等を検討することが望まれる。合理的に物事を判断することができれば、一時的な感情にとらわれずに冷静に対処することができるので環境適応能力は高いと想定されるが、合理的に考えるあまり自分の本音よりも周囲の価値観を尊重してストレスを抱きやすいという可能性もあると考えられる。また、コミュニケーション能力や援助要請能力といった共感性以外の個人的スキルも、環境適応のあり方やストレスに影響を及ぼしている可能性は高いと考えられる。そのため、タイプAやタイプCといったパーソナリティ傾向と、環境に働きかける個人的なスキルの獲得状況の相互作用により、環境適応のあり方やストレス傾向に違いはみられるのか、ということについても検討することが望まれる。

#### 【引用文献】

- 榎本博明 (1987). 青年期 (大学生) における自己開示性とその性差について. 心理学研究, 58 (2), 91-97.
- Eysenck, H. J. (1987). Personality as a predictor of cancer and cardiovascular disease, and the application of behavior therapy in prophylaxis. *European Journal of psychiatry*, 1, 29-41.
- Eysenck, H. J. (1994). Cancer, personality and stress: prediction and prevention. *Advances in Behaviour Research and Therapy*, 16, 167-215.
- Friedman, M., & Rosenman, R. H. (1959). Association of specific overt behavior pattern with blood and cardiovascular findings. *Journal of the American Medical Association*, 96, 1286-1296.
- Friedman, M. (1994). The nature and correct diagnosis of Type A behavior. *J Type A Behavior Pattern*, 5, 3-8.
- 福田正治 (2008). 共感と感情コミュニケーション (II) —共感の現象論— 研究紀要: 富山大学 杉谷キャンパス一般教育, 36, 59-71.
- 福岡欣治・橋本宰 (1995). 大学生における家族および友人についての知覚されたサポートと精神的健康の関係. 教育心理学研究, 43(2), 185-193.

- Grossarth-Maticek, R., Kanazir, D. T., Vetter, H., & Schmidt, P. (1983). Psychosomatic factors involved in the process of cancerogenesis. *Psychotherapy and Psychosomatics*, **40**(1-4), 191-210.
- 橋本和幸・高木秀明 (2006). 大学生の父—母—子との三者関係の認知と基本的対人態度との関連 横浜国立大学教育人間科学部紀要 (I): 教育科学, **8**, 79-98.
- 橋本秀美・塩見邦雄 (2000). 共感性と性格要因との関連について: 共感性の研究 (2) 日本教育心理学会総会発表論文集, **42**, 244.
- Holmes, T.H., & Rahe, R.H. (1967). The social readjustment rating scale. *Journal of Psychosomatic Research*, **11**, 213-218.
- 石原俊一 (2013). タイプC パーソナリティと生活習慣における心理的健康への影響 人間科学研究, **34**, 55-62.
- 伊藤美奈子 (1993). 個人志向性・社会志向性に関する発達的研究 教育心理学研究, **41**(3), 293-301.
- 伊藤忠弘 (2010). 他者志向的達成動機の規定因としての親の養育態度と期待 青山心理学研究, **10**, 1-16.
- 岩永剛 (2003). 性格, 心理状態と病気 (とくにがん) との関連性について 癌と人, **30**, 17-21.
- 加藤隆勝・高木秀明 (1980). 青年期における独立意識の発達と自己概念との関係 教育心理学研究, **28**(4), 336-340.
- 勝間理沙・山崎勝之 (2008). 児童における3タイプの攻撃性が共感に及ぼす影響 心理学研究, **79**(4), 325-332.
- 川端壮康・大淵憲一 (2015). 抑うつ的認知の歪みが攻撃性を促進するメカニズムについて—共感性の影響を踏まえて—尚絅学院大学紀要, **69**, 99-111.
- 川上憲人 (2002). ライフスタイル, ストレスと生活習慣予防 産業衛生学雑誌, **44**, 142-143.
- 菊地長徳・笠貫宏・内山喜久雄・橋口英俊 (1991). 行動パターンと循環器疾患に関する心身医学的研究—リスクファクターとしての行動パターン—(第1報) 平成3年度喫煙科学研究財団研究年報, **3**, 776-779.
- 厚生労働省 (2000). 21世紀における国民健康づくり運動 (健康日本21) について 報告書 Retrieved from [http://www1.mhlw.go.jp/topics/kenko21\\_11/pdf/all.pdf](http://www1.mhlw.go.jp/topics/kenko21_11/pdf/all.pdf) (2017年2月12日)
- 厚生労働省 (2014). 平成26年版厚生労働白書 健康長寿社会の実現に向けて—健康・予防元年— 日経印刷.
- 厚生労働省 (2016). 平成27年人口動態統計月報年計 (概数) の概況 Retrieved from [www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai15/dl/gaikyou27.pdf](http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai15/dl/gaikyou27.pdf) (2017年2月12日)
- 熊野宏昭・織井優貴子・山内祐一・瀬戸正弘・上里一郎・坂野雄二・宗像正徳・吉永馨・佐々木直・久保木富房 (2000). Short Interpersonal Reactions Inventory 日本語短縮版作成の試み (第2報)—33項目版への改訂— 心身医学, **40**(6), 447-454.
- Loeber, R., & Stouthamer-Loeber, M. (1986). Family factors as correlates and predictors of juvenile conduct problems and delinquency. In M. Tony & N. Morris (Eds.), *Crime and justice : Vol. 7*. Chicago : University of Chicago Press.
- 前田聰 (1989). タイプA 行動パターン 心身医学, **29**(6), 517-524.
- 松岡弥玲 (2006). 理想自己の生涯発達—変化の意味と調節過程を捉える— 教育心理学研究, **54**(1), 45-54.
- 内閣府国民生活局 (2008). 平成20年版国民生活白書 社団法人時事画報社.
- 中井大介・茅野理恵・佐野司 (2007). UPI から見た大学生のメンタルヘルスの実態 筑波学院大学紀要, **2**, 159-173.



- 西山温美・笹野友寿 (2004). 大学生の精神健康に関する実態調査 川崎医療福祉学会誌, **14**(1), 183-187.
- 大芦治・岡崎奈美子・山崎久美子 (1996). タイプ A 行動パターンの発達に及ぼす両親の学歴志向および養育態度の影響 発達心理学研究, **7**(1), 41-51.
- 大芦治 (2002). 中学生のタイプ A 行動パターンと両親の養育態度の関係 行動科学, **41**(2), 1-8.
- 大庭三奈 (2010). 大学生の自我同一性との関連からみた共感性の様相—特性不安を心理的不適応の指標として— 九州大学心理学研究, **11**, 127-133.
- 小川雅美 (1991). PBI (Parental Bonding Instrument) 日本版の信頼性, 妥当性に関する研究 精神科治療学, **6**(10), 1193-1201.
- 小川雅美 (1994). 不安神経症患者と両親の養育態度の関連 東京女子医科大学雑誌, **64**(5), 418-423.
- 及川裕子 (2005). 親性の発達に関する研究: 乳幼児の親性の因子構造と背景要因の検討 埼玉県立大学紀要, **7**, 1-7.
- 奥田援史 (1996). 養育態度のタイプと幼児の自律性 滋賀大学教育学部紀要, **1**, 教育科学, **46**, 1-7.
- Parker, G. (1984). The measurement of pathogenic parental style and its relevance to psychiatric disorder. *Social Psychiatry*, **19**(2), 75-81.
- 櫻井茂男・葉山大地・鈴木高志・倉住友恵・萩原俊彦・鈴木みゆき・大内晶子・及川千都子 (2011). 他者のポジティブ感情への共感的感情反応と向社会的行動, 攻撃行動との関係 心理学研究, **82**(2), 123-131.
- 佐々木悠・小林真 (2007). 青年期の対人恐怖心性の規定要因—性別に見た親の養育態度と自己愛傾向による影響— 富山大学人間発達科学部紀要, **2**(1), 179-187.
- 佐藤公代 (2001). 親の養育態度と子どもの性格形成に関する研究 愛媛大学教育学部紀要, 第 I 部, 教育科学, **47**(2), 25-29.
- 瀬戸正弘・長谷川尚子・坂野雄二・上里一郎 (1997). 「日本的タイプ A 行動評定尺度 (CTS)」開発の試み カウンセリング研究, **30**(3), 199-206.
- 島井哲志・大竹恵子・宇津木成介・内山喜久雄 (2001). 情動知能尺度 (EQS) の構成概念妥当性と再テスト信頼性の検討 行動医学研究, **8**(1), 38-44.
- Simon Baron-Cohen. (2003). *The Essential Difference: Men, Women and the Extreme Male Brain*. Allen Lane.
- (三宅真砂子 (訳) (2005). 共感する女脳, システム化する男脳 日本放送出版協会)
- 田島祐奈・山崎洋史・岩瀧大樹 (2015). 青年期における対人欲求および同調行動に関する研究 学苑・人間社会学部紀要, **892**, 105-111.
- 谷芳恵 (2010). 公共場面における迷惑行為に対する罪悪感: 共感性, 公的自己意識, 私的自己意識との関連から 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, **3**(2), 21-26.
- Temoshok, L., & Dreher, H. (1992). *The type C connection: The behavioral links to cancer and your health*. New York: Random House.
- (岩坂彰・本郷豊子 (訳) (1997). がん性格—タイプ C 症候群— 創元社)
- 登張真稲 (2003). 青年期の共感性の発達: 多次元的視点による検討 発達心理学研究, **14**(2), 136-148.
- 戸ヶ崎泰子・坂野雄二 (1997). 母親の養育態度が小学生の社会的スキルと学校適応におよぼす影響—積極的拒否型の養育態度の観点から— 教育心理学研究, **45**(2), 173-182.
- Thomas, C. B., Duszynski, K. R., & Shaffer, J. W. (1979). Family attitudes reported in youth as po-



tential predictors of cancer. *Psychosomatic Medicine*, **41**(2), 287-302.

豊田弘司 (2008). 女子大学生における情動知能に及ぼす共感経験の効果 教育実践総合センター研究紀要, **17**, 23-27.